



里山を守り、「緑の生活」を提案したい。 トラスト活動起点にフットパス整備

NPO法人 ウヨロ環境トラスト

北海道胆振支庁管内の中央に位置する太平洋沿岸の白老町。町を流れるウヨロ川周辺には、里地・里山の牧歌的景観が残されている。その景観と自然環境の保全活動を行っているのが、NPO法人ウヨロ環境トラストだ。放置され、荒れ放題となったカラマツの森林を仲間と資金を出し合って購入し、「トラストの森」として保全。森林の再生とともに、フットパス（自然歩道）の整備などのボランティア活動を進め、都市住民に自然とのふれあいを楽しむライフスタイルを提案している。

概要

→ NPO法人 ウヨロ環境トラスト

白老町の人口は約2万人。面積は425平方キロメートルで、4分の3を森林が占める。2001年10月、有志が資金拠出し、ナショナルトラスト活動の拠点となる自然環境保全地「トラストの森」2.2ヘクタールを取得。同年11月に設立総会を開き、会員15人で活動を開始。04年に北海道のNPO法人の認証を受け、特定非営利の活動として森林づくりや環境学習活動を柱に自然環境の保全を進めている。現会員は47人。



<http://www.shiraoi.org/trust>

人手にわたったカラマツの森 有志が買い戻して再生へ

インターネットで「北の里山事典」を検索する。「里山自然図鑑」「里山遊び図鑑」「里山の文化」「里山マップ」の4項目で構成されている。「里山マップ」には探索マップとともに、「3Dマップ」というものがある。

る。航空写真と標高データを重ね合わせ作成した3D（立体）画像で、白老町石山地区を流れるウヨロ川周辺を、鳥の目線で上空から眺められ、空中散策が擬似的に体験できる。

この「北の里山事典」の作成者が、ウヨロ環境トラスト。子ども向けのデジタル教材として2007年から公開されている。「里山遊び図鑑」



ウヨロ川沿いのフットパス。自然を生かして整備されたコースは清らかな流れが迎える



カラマツの間伐材を利用して建てた、ウヨロ環境トラストの拠点「ウヨロ小屋」

は地元の高校の放送局部員がビデオ撮影に協力した。

白老町石山地区は、カラマツ林が延々と広がり、平地の牧場には和牛や馬が草をはむ姿が見られるなど、北国らしい里地・里山の景観を示す。しかし、「1970年ころ、列島改造ブーム以前のことですが、比較的平地にあるこの森林が狙われたのです。投機目的で不在地主の手に渡っていった。当然、その森林は間伐などの育林はされず、放置されたまま。森林は荒れ放題になっていった」と、NPO法人ウヨロ環境トラスト専務理事の河野功さん(68)は振り返る。

「里山を守りたい」。住民が立ち上がった。仙台市の会社が経営難に陥り、同地区に所有していたカラマツの人工林2.2ヘクタールを手放すことになった。2001年10月、有志15人が資金を出し合い、これを取引。11月にトラスト設立総会を開き、この森林を、ナショナルトラスト活動の拠点として、「トラストの森」と命名。翌月からトラストの森の間伐や枝打ちなどの手入れ作業をスタートさせた。

何から手をつけたらいいの

周辺地域も含めて除間伐

取得したトラストの森は、植林されてから35年間一度も間伐もされていないカラマツ林。「里山を守りたい」という気概は十分だったが、多くの人たちが木1本切った経験がない。「一体どうしたらいいの。何かから手をつけていいの。一時的な活動では森林は再生できない。継続こそが成否を握る。最初は戸惑うことばかりでした」と同トラスト理事の濱田満さん(73)。濱田さんは北海道庁職員OB、林業の普及指導を担当していた。

トラスト所有の2.2ヘクタールに加え、03年から隣接のカラマツ林



トラストの森での枝打ち作業



荒廃した林を再生するために駆けつけたボランティアに間伐の方法を手ほどき

も所有者の承諾を得て保全協定を結び、間伐や枝払いなど、他人の山の手入れにも乗り出した。会員たちは、除間伐のための研修を重ねた。チェーンソーを扱う伐木業務資格者が12人、刈り払い機作業の安全衛生教育修了者は16人を数える。

保全協定締結面積は、今では29ヘクタールにまで拡大。08年度は所有地、保全協定締結地にその他間伐請負地を加え、約11ヘクタールからパルプ材として583立方メートル、ほだ木4530本などを出荷した。補助金があるものの45万円の赤字を出すまでになっている。

電気通らない広々とした空間 子どもがエコキャンプ

同トラストは「林業的な面と環境ボランティアの面を両立させて活動

している北海道内でも屈指の団体」(北海道胆振支庁産業振興部林務課)といわれるように、もう一つの目標である自然・環境学習の場の提供にも力を注ぐ。カラマツの間伐材を利用して拠点施設のウヨロ小屋を建設。雨天でもテントが張れ、たき火もできる大型東屋のウヨロ・ドームや樹間テラスのツリーハウスもつくり、トラストの森を地域住民のほか都市住民にも開放している。

NPO法人北海道市民環境ネットワークとの連携によって、札幌市およびその周辺の都市住民が参加する植樹イベントを毎年継続して実施するほか、企業の社員による植樹活動、一般参加者を募集する里山保全ボランティア体験事業を実施。33平方メートルにつきカラマツ1本の割合で間伐され、電気の通っていない広々とした空間のウヨロ小屋周辺で



トラストの森で行われる子どもたちを対象にしたエコキャンプ。ウヨロ川の生物観察や間伐の手伝いも

は子どもたちを対象とした夏・秋・冬のエコキャンプも実施している。

15分も歩けば「景色が変わる」
秋にはサケの産卵に遭遇

そして、いま活動に力が入っているのが、フットパスによる都市住民

との交流、「緑の生活」の提案だ。フットパスとは、地域の自然や歴史、文化資源などをつないだ歩く道のこと。本場の英国では19世紀からこのような道がつけられ、国民の間には、この道を生活路として使うだけでなく、歩くことを楽しむ文化として生活に根付いている。

白老町では、ウヨロ川周辺の里山「トラストの森」「エコの森」「萩の里自然公園」を結ぶ「ウヨロ川フットパス」を観光資源として積極的にPRしている。総延長は14キロメートル。1周4キロメートルのトラストの森コースなど、時間や体力に応じて自分で選ぶことができる。全体的に起伏が少なく歩きやすくなっており、周辺の環境は河川、森林、牧場など変化に富み、春の新緑から秋の紅葉まで季節の変化を楽しむことができる。特に秋にはサケの遡上や自然産卵の様子を見ることができ、ほか、サケマスふ化場、白老牛の放牧地、現役を引退した競走馬を預かる牧場なども散策コースになっている。

「北海道では道東など雄大な景色はどこにでもある。しかし、ここでは15分歩けば景色が変化する。コンパクトで、のどかな牧歌的な風景がある。札幌からも車で1時間余、電

車でも特急で1時間。ぜひ足を伸ばし、ゆったりと里山を楽しんでほしい」との思いが、フットパスに込められている。

北海道内の各地で広がりつつある

フットパスづくりでも、ウヨロ環境トラストは先導的な活動をしている。発足2年目の02年には現在のフットパスの一部を歩き、フットパス構想を現地で検討。荒れたけもの



牧場もコースに組み込まれているフットパス。牧歌的な風景を満喫しながら散策



突破口

NPO法人
ウヨロ環境トラスト
専務理事
河野功さん(68)

問題が起これば早めに対処

根気よく継続的にやるしかない

ウヨロ環境トラストは河野功さん、濱田満さん、辻昌秀さんの3人が、けん引役となって活動を続けてきた。河野さんは不動産業を営む。「濱田さんは林業の指導者。辻さんは企画力が抜群。時には怒鳴り合いのけんかをすることもあります。『荒れたカラマツ林の手入れをして、次の世代に引き継ごう』を合言葉に、ここまでやってきました」と河野さん。

フットパスの定着に心血を注ぐ。「フットパスは、地域住民にとってプラスばかりではありません。無造作に山菜やきのこをとっていく人もいます。多くの人を訪れば騒音も問題になります。このフットパスは公有地ばかりでなく、牧場や砂利採取地を歩かせてもらっています。話し合いの結果、ご厚意でトイレまでも使わせてもらっています」と、私有地を通るフットパスであることを強調する。

このため、問題が起これば早い解決を心がける。その一例。放牧地に入出入りするゲートは有刺鉄線で作られていたが、訪問者が閉め忘れることがあった。開いたままでは牛が牧場外に出てしまう。開閉しなくても柵を乗り越える階段型のゲートに変更した。

ごみ問題にも心を傷める。散策しながら、ごみを捨てていく人が少ないながらもみられるからだ。「歩道脇や側溝にごみを見つけることがあります。落ちていれば拾う。この繰り返しです。美しい森林・里山を後世に残すことが活動の出発点でした。山の再生にしても、根気よく継続的にやることで道は開けていきます」と河野さんは力を込める。



フットパスに立つ案内板と柵を乗り越える階段型のゲート(右下)

道を整備するなど、フットパスづくりに乗り出した。04年のNPO法人認証を経て、06年にはウヨロ川やフットパス周辺を紹介する「フットパス・マップ」を林野庁の助成を受け5000部作成し、フットパスの宣伝活動を展開している。

都市住民との交流を積み重ね 里山の大切さをアピール

ウヨロ川周辺の里山コースには私有地が含まれる。同トラストは所有者と話し合い、フットパスへの協力の利用の承諾を取り付けた。そして看

板、案内標識の設置、年2回のササ刈りや草刈りなど歩道の整備に汗を流している。

フットパス利用者は増えているのか。「二人一人に名前を書いてもらうわけではないので、正確には分からないが、年々増えているのは実感できる。09年は上期1000人、下期2000人ぐらいではないか。JRや旅行者がエコツアーに組み込み、1日に2000人を超したときもあり、コントロールできない状態になることもあった」と河野さん。

河野さん、濱田さんとともに、設立時から活動の核になっている同トラスト常務理事で、白老役場勤務の辻昌秀さん(55)は「事業創出機会としてフットパスのガイドを考えたいが、平坦でガイドマップを片手に案内なしでも散策できるので、ガイドを依頼する人は予想より少ない。ビジネスの面では難しいですね。それよりも都市住民との交流を通して、里山の大切さを知ってもらいたい。そのためには、地理的に北海道外からの誘客は難しいが、近くの札幌などを中心に『ウヨロ川フットパス』を積極的にPRし、訪問者の数を高めていきたい」と、認知度アップに腐心する。



山村を 拓く

2009年度
山村活性化事例集

本事例集は、山村再生の先駆的事例や林野庁補助事業の「森業・山業（もりぎょう・やまぎょう）創出支援総合対策事業」「山村力（やまちから）誘発モデル事業」および「山村再生総合対策事業」に採択された事例のうち、「環境・健康づくり」「教育・人づくり」「産業・地域づくり」に取り組む、NPO法人、財団、自治体、森林組合など20事例を取り上げ、活動内容およびその中心となって活躍している人々を紹介します。また、山村活性化アンケート調査結果の概要を掲載しています。

取材先の方々におかれましては、大変お忙しいところ快く取材に応じていただき、多大なご協力を承りましたこと、厚く御礼申し上げます。

2010年3月1日 ㈱JA情報サービス

Contents

環境・健康づくり

里山を守り、「緑の生活」を提案したい。トラスト活動起点にフットパス整備 北海道 NPO法人 ウヨロ環境トラスト	6
林業を100年単位で考えたい。森林セラピー基地も運営 宮城県 登米町森林組合	10
森林浴プラス森林セラピー基地 自然休養林を核に健やか町づくり 長野県 上松町	14
人形工房から生まれた 森林、山村体験の場 山梨県 株式会社 森林工房セプリ舎	18
鳥の目線で里山の自然を楽しむ ツリーハウスづくりに奮闘中 宮崎県 NPO法人 ひむかり山自然塾	22
山岳への観光客集中を分散化 梢越しの視線楽しむ空中回廊 鹿児島県 梢回廊キャノッピ	26

教育・人づくり

木の「ほぐし織り」事業を軸に 自遊育で匠の大切さを伝授 群馬県 NPO里山の学校	30
里山が舞台の冒険キッズ 食がテーマの農と暮らしの学校 岐阜県 郡上八幡・山と川の学校	34
山の恵みが教材 里山の暮らしを伝える 富山県 自然体験学校 夢創塾	38
山よ 緑よ ふるさとよ 天保時代から山を守ってきた精神がある 兵庫県 財団法人 大山振興会	42
参加者をお客さん扱わない 世界のボランティアが集結 福岡県 国際里山・田園保全ワーキングホリデー実行委員会	46
カメルーンのサッカーチームが合宿 次は大学生が指導する田舎体験 大分県 財団法人 中津江村地球財団	50

産業・地域づくり

木を使ったニュースポーツ クップで森林・林業日本一へ弾み 岩手県 住田町	54
民・官・学の連携で 農山村の魅力創出をめざす 秋田県 NPO法人 常盤ときめき隊	58
最上の「川の駅」と「森の駅」 森の中から地域を活性化する 山形県 株式会社 大場組	62
山里体験を地域再生と 山村ビジネスにつなぐ 埼玉県 NPO法人 ときがわ山里文化研究所	66
農山村と企業を元気にする協働活動 一社一村しずおか運動 静岡県建設部農地局農地保全室	70
林業家女性の地位向上による 山村の活性化に取り組む 岡山県 新見市神郷女性林業研究グループ	74
都市生活者の視点で地域資源見つめ 豊かな自然を売り物に新たなツアー 山口県 NPO法人 ほっとにしき	78
理念は「どんぐりから柱まで」 林業あってこそその村を实践 高知県 株式会社 エコアス馬路村	82

提言 「みどり豊かな国土形成は元気な山村再生から」 東京農業大学地域環境科学部教授 宮林 茂幸	86
2009年度 山村活性化調査結果の概要	88

